

ベトナムでの学術交流と祠・寺・廟

―二〇一五年度の調査から―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 吉田 一彦

仏教と神信仰との融合

仏教と神信仰の融合は日本では「神仏習合」と呼ばれ、しばしば日本の宗教の大きな特色であるように説かれる。だが、宗教や信仰の融合は世界のあちろちらにごく普通に存在し、アジアの各地にも広く見られる。日本の宗教を考究するには、その融合の様相を他の地域の融合の諸相と比較し、それらの共通性を明らかにするとともに、地域ごとの差異を明確化していくことが必要になると考える。この作業によって、各地域の宗教、そして思想、文化の個性が明らかになるだろう。

私たちは、現在、科学研究費の補助を受けた共同研究「日本における仏教と神信仰の融合に関する総合的研究―アジアとの比較の視座から―」（基盤研究（B）、研究代表者吉田一彦、平成二六―二八年度）に取り組んでいる。二〇一四年度は、共同研究チームによって、九月一

日～一七日に中国山東省の寺・廟・山岳信仰などの調査を、三月一七日～二二日に中国四川省の大足の石刻群の調査を実施した。

山東省では、泰山に登って山岳信仰、冥界信仰の原点とでもいう世界に触れ、神通寺址、黄石崖、大仏頂、開元寺址、雲門山石窟、駝山石窟、孔子廟、靈巖寺、魚山、山東省博物館、山東石刻美術博物館、青州博物館、緋川市博物館などを調査することができた。大足では、北山石刻、宝頂山石刻、南山石刻、石篆山石刻、妙高山石刻、尖山子石刻、石門山石刻、四川博物院などを調査して、宋代の貴重な銘文や、観経変相、地獄変相、父母恩重経変相、六道輪廻図、千手観音像、釈迦涅槃像、孔雀明王像、水月観音像、道教の三清、山王土地などの諸像を見出し、さらに釈迦・老子・孔子が一緒にまつられる姿を目の当たりにして、多くの知見を得ることができた。

ベトナムの調査

二〇一五年度は、ベトナムのハノイ、ダナン、ホイアン、フエの祠・寺・廟・亭などの宗教施設を調査し、ベトナム社会科学院宗教研究院と学術の交流を行なった。以下にその概要を記しておくこととしたい。調査日程は二〇一五年九月一〇日～一七日、参加者は、吉田一彦、佐藤文子、二階堂善弘、荒見泰史、曾根正人、伊藤聡、高井龍であった。

二〇一五年九月

一〇日 ハノイへ。西湖府、鎮国寺、鎮武観、玉山祠。大西和彦氏と学術交流の打ち合わせ。ハノイ泊。

一一日 ベトナム社会科学院宗教研究院にて学術交流。昼食会。文廟、法雲寺、寧福寺、建初寺、古書店。ハノイ泊。

一二日 ホアルー址、ディン・テイエン・ホアン祠、レ・ダイ・ハン祠（工事中）、ビックドン、陳廟、普明寺。ハノイ泊。

一三日 ダナンへ。カオダイ教ダナン聖堂、チャム美術館、ホイアン泊。

一四日 ホイアンの祠・寺・廟。法宝寺、信義祠、関公廟、広

肇会館、福建会館、ホイアン世界文化遺産センター、五行山、日本人墓（具足君番二郎）。ホイアン泊。

一五日 ホイアンの祠・寺・廟。ハイヴァン峠を経由してフエへ。峠のアム、玉蓋山神祠、慈孝寺、報国寺（釋本慧氏インタビュー）。フエ泊。

一六日 フックテック村へ。村の家、宗教施設、福宝寺。フエへ。妙諦国寺、慈曇寺。フエチエックアウト。

一七日 ハノイ経由にて帰国。

学術交流

ベトナム社会科学学院宗教研習院との学術交流は、同院客員研究員の大西和彦氏⁽¹⁾と、私たちの共同研究チームの佐藤文字子氏⁽²⁾の企画によって実現することができた。宗教研習院および両氏に心より感謝申し上げます。次第である。

宗教研習院では大変温かい歓迎を受け、ベトナムの宗教、思想、文化などについて多くの知見を得ることができ、有意義な交流となった。当日は、最初にグエン・クオック・トゥアン院長から歓迎のあいさつと宗教研習院の概要紹介があ

り、続いて吉田が訪問の挨拶と一行の紹介を行なった。大西和彦氏の丁寧な通訳により、言葉が正確に伝わったのがありがたかった。私たちは著書、論文等を寄贈し、宗教研習院から貴重な参考文献となる刊行物（『宗教研習院』Religious Studies, vol.48, 2010-2014）の寄贈をうけた。

私たちは、吉田一彦「アジアの中の日本の神仏習合」、佐藤文字子「日本宗教の現況およびその生成過程」の二つを報告し、宗教研習院からは日本からの事前の質問に応答するという形で、グエン・クオック・トゥアン院長の「ベトナムにおける宗教の混交、統合とその諸段階」、伝統宗教・信仰研究室長のグエン・グオク・マイ氏の「ベトナムの葬送儀礼」および「ベトナムにおける巡礼と山岳信仰」、宗教研習院室長のチャン・アン・ダオ氏の「ベトナムの祖先信仰」および「ベトナムの信仰における儒教の影響」をテーマとする論が報告された。

私は、日本の宗教の融合の様相とアジア諸地域における融合の諸相とを比較、考究しようとしてこの研究を進めていること、これまでに中国、韓国、台湾、あるいは内モンゴル自治区などを調査してきたことなどについて述べた。佐藤氏は、日

本の宗教の現況を近世・近代の宗教史の展開の中から説明し、日本の歴史学・民俗学などにおける宗教理解や日本文化論をめぐる言説について紹介した。その上で、日本宗教史の特質を「固有性」という観点からではなく、「地域性」からとらえようとする研究視座を提示した。

グエン・クオック・トゥアン氏からは、ベトナムには宗教の融合について「混交宗教」という表現があり、また自分では「統合」という概念がふさわしいと考えており、「シンクレティズム」概念はふさわしくないとする見解が述べられた。その上で、外来の儒仏道三教とベトナムの神信仰との混交、統合の歴史的諸段階が論じられた。次いで、グエン・グオク・マイ氏からベトナムの葬送儀礼における八段階の手順について、詳細にその作法や意味が説明された。そして、ベトナムの巡礼について山岳信仰の観点から説明がなされ、寺院と廟がしばしば山上に併置されること、廟には山神（女神）がまつられ、祭祀が行なわれることについて論説された。次いで、チャン・アン・ダオ氏から、ベトナム人の祖先崇拜と儒教との関係は百年にもおおよぶ研究史を持つ大きな研究テーマであること、フランス人学者、ベトナム人学者などによる多くの研究があること

などが具体的に紹介された。そして、ベトナムの祖先信仰に儒教の影響は薄いと見る見解もあるが、自分は儒教の影響があると考えており、その実相を解明するため三十年ほど村落内の信仰を研究しているとの論説がなされた。

その後、活発な質疑応答がなされ、曾根正人氏、荒見泰史氏の質問に丁寧な応答があり、予定の時間を大幅に超過して交流会が終了した。終了後、グエン・クオック・トゥアン院長のお世話で昼食会が行なわれ、美味しいベトナム料理をいただきながら、宗教、歴史、文化など学問の話に花が咲いた。

ハノイ中心部の寺と祠

次に、今回訪れた祠・寺・廟のいくつかについて記しておきたい。今回の行程には、ハノイ日本語ガイドクラブの会長を務めるブ・タイ・チン氏がガイドとして同行してくれ、インタビュ어의通訳などを行なってくれた。

ハノイの第一日目には町の中心部にある西湖府を訪れた。西湖府は西湖に突き出る半島の先端にあり、山神である柳杏聖母がまつられている。私は、中国の『出三蔵記集』や『高僧伝』などに描かれる廬山の湖廟の



写真1 西湖府の参道の疏

神や山神のこと^③を思い浮かべながら参道を進んでいった。参道にはお供えなどを販売する露店が並び、その中に神への願いの文書を書いてくれる店がある。この文書を「疏(ソウ)」といい、黄色い用紙に朱色で文書が入れられており、そこに漢文で願いを書き入れて住所、氏名などを記入する。参道が一番奥右側の店にて佐藤氏がこの疏を書いてもらった。これを府内の祭壇に供えてから府内の炉で燃やすと願いの事が天に届くという。

西湖府の正殿は、疏を書いてくれた方によると、前殿が「公同(コンドン)」、奥宮が「班母(バンモオ)」というらしい。前殿には道教の神々



写真2 西湖府の柳杏聖母像

がまつられ、奥宮には柳杏聖母と上岸聖母、水宮聖母がまつられる。また、右隣には「山荘(スンチャン)」と呼ばれる建物があり、上岸聖母などの女神の山神がまつられる。私たちは、ベトナム最初の訪問地で聖母信仰、山神信仰に接することができ、強い印象を受けた。なお、今回の調査では、フエの玉蓋山恵南殿でも上岸聖母、水宮聖母などの聖母信仰に触れることができた。

次に、西湖の中の小島にある鎮国寺を訪れた。寺までは橋を渡っていく。橋の渡り口には放生のための放生亀が売られていた。伊東照司氏によると、鎮国寺は六世紀に創建されたと伝える古寺で、十七世紀に現在



写真3 鎮国寺

地に移転したという。寺内には十四の石碑が残り、そのうち阮朝の一八一五年の石碑の記述から、現在の建物が十九世紀初めに修造されたものであることが知られるという⁽⁴⁾。本堂の屋根には「鎮国古寺」の寺号が端正な漢字で記されている。中に入ると、本堂上殿にずらりと仏菩薩の像が並び、壯観である。仏菩薩の壇は、日本の雛飾りの段飾りのように奥が高くなっていて、少しずつ手前に低くなりながら何段にもわたって仏像が安置されている。奥の最上段が三世仏で釈迦と阿弥陀と弥勒の三如来。その次が釈迦三尊で釈迦如来と阿難尊者と迦葉尊者。その次が阿弥陀三尊で阿弥陀如来と観音



写真4 玉山祠のチャン・フン・ダオ（陳興道）像

菩薩、勢至菩薩。その次が弥勒三尊で弥勒菩薩と文殊菩薩と普賢菩薩。その次が准胝観音。その次が釈迦誕生仏と梵天と帝釈天、そして一番手前が釈迦涅槃像となっている。左右の通路ぞいには地獄の十王が並んでいる。本堂には、他に多くの神々がまつられている。ハノイ歴史研究会のサイトによると、それらはチャン・フン・ダオ（陳興道）、三蔵法師、関帝、徳翁、護法神であるという⁽⁵⁾。陳興道は十三世紀の実在の人物で、ベトナムが元の攻撃を受けた時、モンゴル軍と勇敢に戦ってベトナムを守った著名な将軍で、ベトナムの諸々の宗教施設で神としてまつられている。徳翁は土地の神で、ベトナムの宗教

施設でしばしばまつられている。鎮国寺には、また祖師堂があり、この寺で活躍した過去の僧たちや聖母などがまつられている。

次に、チェックバック湖の南にある鎮武観を訪れた。ここは巨大な真武帝像（玄天上帝）がまつられる道観として知られており、高さ三・九六メートルのブロンズ像で重量が四トンもあるという。「真武帝」はもと「玄武大帝」といい、四霊の一つの玄武を人格化して神にしたもので、北方の守護神とされているという⁽⁶⁾。中国では、宋代からこの神に対する本格的な信仰が展開したが、大中祥符五年（一〇二二）に宋朝の祖の趙玄郎の諱（いみな）をさけて「玄武」の名を「真武」とあらためたという⁽⁷⁾。同行の二階堂善弘氏がこの神について詳しく説明してくれ、この神がベトナムでまつられていることの意味を考えることができた。

次に、ホアンキエム湖の小島ゴックソン島にある玉山祠を訪れた。ここも橋を渡って祠へと進んで行く。入口を入るとすぐに筆塔があり、その下に石敢当がまつられている。さらにその隣に小さな山神廟があつて中に山神がまつられている。玉山祠の本殿には、前殿に関帝、呂祖、文昌帝君がまつられ、後殿にはチャン・フン・ダオ（陳興道）がまつら

れている。私はここで、陳興道がベトナムの人々にとつて偉大な人物であり、神であることを目の当たりにすることができた。

ハノイ東部の古寺

ハノイには、ベトナム初期の寺院がある。私たちは、ハノイ東郊のタイン・クイン村にある法雲寺（別名チュア・ダウ、ダウ寺）を訪れた。ここは、ベトナムの仏教の初伝説話を持つ寺である。二世紀、この地域はルイ・ラウ（羸隲）と呼ばれ、インド僧が訪れて仏教を伝えたという。説話では、カラーチャールヤ（黒師）というインド僧がこの地に来て、榕樹（ガジュマル）の木の下の小屋で暮らしていた。マン・ヌン（蛮娘）という娘がこの僧の弟子になって仏教を学んでいたが、ある時、この僧が娘が地面で寝ているところをまたぐと、娘は妊娠し、子が生まれた。カラーチャールヤは娘を榕樹の所に



写真5 法雲寺の法雲神像

連れていき呪文を唱えると割れて穴があき、赤子を中に入れると穴は閉じられてしまった。また、カラーチャールヤがマン・ヌンに授けた杖があり、早魃の時にこの杖を地面にさすと水が湧き出たという。その後、榕樹は枯れて川に落ち、流れてダウ村にやってきた。神のお告げがあつてこの榕樹から四つの神像を掘り出すと、一つ掘り出すごとに、順に、五色の雲が出現し、雨が降り、雷が鳴り、稲妻が空に輝いた。それら四つの神像をまつたのが法雲寺、法雨寺、法雷寺、法電寺であるという⁽⁸⁾。現在も法雲寺には、法雲神像が本尊としてまつられている。

私たちは法雲寺で本尊の法雲神像に接することができ、強い衝撃を受けた。それは黒色もしくは濃褐色というべき濃い色の女神の坐像で、衣服を着し、冠をかぶっていた。仏教寺院、しかもベトナム最古という伝承を持つ仏教寺院の本尊は、仏像ではなく、神像であった。脇士には、玉女像と金童像がまつられていたが、それは独特の美しい女性像であった。同寺には、他に仏菩薩、神、人物の像が多数まつられ⁽⁹⁾、説話に登場するカラーチャールヤ像もまつられていた。

私たちは、さらに寧福寺、建初寺、普明寺を訪れた。いずれの寺も、本



写真6 寧福寺の千手観音菩薩像

堂の上殿の仏菩薩の像は鎮国寺と同じように階段状に配置される形式になっていて、奥の最上段が三世仏、その次が釈迦三尊というように、何段にもわたって多数の仏像が林立するように安置されている。

寧福寺（別名チュア・ブツ・タツブ、ブツタツブ寺、筆塔寺）では、傑作として知られる千手観音菩薩像（一六五六年）をはじめとして、象に乗る半跏の普賢菩薩像、苦行釈迦如来像など名品ぞろいの仏菩薩像の数々に間近に接することができた。また、筆塔寺の名の由来となった塔を実見することができた。木造三層の積善庵は、碑文の記載から一六八一〜一六九一年の成立であることが知られる。内には回転塔（九品蓮華回転塔）がある。報嚴塔は五層の石塔で、レリーフが美しい。碑文から開山の啜啜禪師の墓であることが知られるという⁽¹⁰⁾。

境内の最奥には御影堂がある。こ

ここでは、三人の王妃、王女の坐像が安置されていて、ベトナムにおける「女性と仏教」の問題を考える手がかりを与えてくれる。

宗教施設の並立

私たちが建初寺（チュア・キン・サ）に到着した時はすでに午後五時を過ぎており、門が閉じられていたが、ガイドのチンさんがお寺の方にお願したところ、幸いにも門があき、拝観が許された。この寺院もベトナムを代表する古寺で、中国から来た無言通という禅僧が活動したことで知られる。大殿には階段状に仏菩薩の諸像が安置されており、その向かって右の通路を進むと、無言通禅師像や李朝の太祖像がまつられている。また、本堂の背面には五つの仙人世界を描いたレリーフがまつられている。さらに、本堂の向かって左奥には聖母堂があり、聖母像や五



写真7 建初寺の無言通禅師像



写真8 タイン・ゾン・ディンの天上神像

王などがまつられている。

さて、建初寺が所在する地には、同一敷地に三つの施設が並んでいる。向かって一番左が建初寺、その右隣が村の神をまつるタイン・ゾン・ディン（亭）、そして一番右が人民委員会の施設であった。タイン・ゾン・ディン（亭）も、遅い時間であったが、内部の拝観が許された。ここには「天上神」の像がまつられており、額には「扶童天王」と記されている。建初寺とタイン・ゾン・ディン（亭）は、正面入口には両施設の間に境があるが、中に入って裏にぬけていくと連続した敷地で往き来が可能になっており、同一敷地に仏教寺院と神をまつる施設とが並立する形態になっていた。

普明寺（別名チュア・タップ、タップ寺）は、陳朝第三代の仁宗の遺骨



写真9 左が建初寺、右がタイン・ゾン・ディン

を収める四角十四層の普明塔があることで知られる。この塔は、一三〇五年、陳朝第四代英宗による建立だという。仁宗（李乾徳）は退位後に出家して禅の修行を行なったことで知られ、英宗も晩年に出家して禅僧になったという¹¹⁾。君主の出家は、アジアの仏教史を考える上で重要な論点の一つとなるものである。

普明寺のすぐ近くに陳廟がある。ここには陳朝の王十四人がまつられ、あわせてチャン・フン・ダオ（陳興道）がまつられている。私たちは陳廟にて、『陳廟とタップ寺』¹²⁾の著者であるトリン・ティ・ンガ氏に出会い、お話をうかがうことができた。陳廟は一三三八年に建立がはじまり、

一二六二年に完成したという。この地にはもと陳の重光宮があり、普明寺はその重光宮に隣接してあり、のちに境内地が拡大していったという。なお、現在、王宮址の発掘調査が進められているという。

このように、ベトナムには、神をまつる施設と仏教寺院とが同一敷地あるいは隣接敷地に並立して建立される事例が確認できる。

ベトナムには人々の信仰が息づいている。それは、複数の宗教が融合、複合したものであって、その融合の度あいは日本の「神仏習合」よりも深く、濃密に溶融したものであるように私には思われた。

今回の調査では、さらにダナン、ホイアン、フエの祠・寺・廟などを調査し、面然大士像や白衣観音像などに会うことができたが、それらについては次の機会に述べることにしたい。

〔注〕

(1) 大西和彦「ベトナムの道観・道士と唐宋道教」(野口鐵郎他編『講座道教6 アジア諸地域と道教』雄山閣、二〇〇一年)。同「ベトナム道教研究史小論」(ベトナムの社会と文化)四、二〇〇三年。同「一八世紀ベトナム仏教儀礼文書集に見える仏僧の道士としての役割」(ベトナムの社会と文化)七、二〇〇七年など。

トナムの社会と文化」七、二〇〇七年など。

(2) 佐藤文子「ベトナムで見た(国史学)の足あと―弥次郎兵衛の墓と黒板勝美」『人間文化研究所年報』八、二〇一三年など。

(3) 拙稿「多度神宮寺と神仏習合」(梅村喬編『古代王権と交流 4 伊勢湾と古代の東海』名著出版、一九九六年)。

(4) 伊東照司「ベトナム仏教美術入門」雄山閣出版、二〇〇五年。

(5) ハノイ歴史研究会「知ろうベトナム! 鎮国寺」(<http://hanoirekishu.web.fc2.com/chinkokujishi.html>)。

(6) 二階堂善弘「中国の神さま」平凡社新書、二〇〇二年。

(7) 窪徳忠「道教の神々」講談社学術文庫、一九九六年。

(8) この説話については、注4伊東照司著書。石井公成「ベトナムの仏教」(『新アジア仏教史』一〇 朝鮮半島・ベトナム 漢字文化圏への広がり) 佼成出版社、二〇一〇年)。私たちはゲン・クオック・トゥアン院長から報告の中でこの説話についてうかがった。

(9) 伊東照司注4著書に「法雲寺の伽藍配置」(法雲寺の中心部、仏像などの配置(一九九三年当時)の二図が掲載され、有益である。ただ、二〇一五年九月の仏像の配置は少し変化していた。

(10) 寧福寺の歴史、彫刻、建築については伊東照司注4著書。現代の寧福寺の活

動については、ファム・ティ・トゥ・ザン「現代のベトナム仏教」(注8『新アジア仏教史』一〇)所収)。

(11) 伊東照司注4著書。

(12) Trịnh Thị Nga [ĐỀN TRẦN, CHÙA THÁP] HÀ NỘI, 2011